

小学校低学年国語授業における学習活動の構想 (1)

—— 2年説明文「さけが大きくなるまで」の教材解釈と発問づくり ——

栗原 昭徳・成石せつ子・竹下 真生

A Design of Learning Activity in National Language Lesson
of the Elementary School Lower Grades (1)

—— An Explanation of 2nd Grade “Till a Salmon Grows Big” ——

KUWAHARA Akinori, NARUIISHI Setsuko, TAKESITA Maki

(Received January 10, 2006)

キーワード：わかる授業、教材解釈、説明文

1. はじめに

学校教育において、授業は最も中心的な位置にあるとともに、最も重要な課題を担っている。その中でも「各教科の授業」は、客観的にみれば、教師から子どもたちへの「学習内容の伝達」である。ここで「学習内容の伝達」と表現したが、それは教師から子どもたちへの単なる「伝達」ではない。厳密に表現すれば、教師から子どもたちへの学習内容の「仲立ち」であり、「媒介」(Vermittlung)である。

授業におけるこのような意味の「伝達」が成立するためには、次の三つが必要となる。

① 教師と共に子どもたち自身が身の回りの学習環境を意識的に整え、自主的な学習準備や授業始まりの自主管理ができるようになること。これも、授業における教師の指導の範囲である。

この段階では、1時間ごとに変化発展する学習内容が、直接的に問題にされることはない。しかし、それらの事柄は、どの教科においても共通して指導しなくてはならない。いわば授業を成立させるための基盤となる授業秩序の指導である。もちろん「各教科」の授業以外の「道徳」や「特別活動」や「総合的な学習の時間」の授業においても必要となる事柄である。栗原は、これに「学習規律の指導」と名付けてきた。

② そのほかに、その教科や領域に独自の学び方(学習方法)やノートの使い方、家庭学習の方法などに習熟していると、子どもたちの自主的な学習活動はますます活発となり、促進される。それは、「学習方法の指導」である。

③ 毎時間の授業においては、教材それ自体が、子どもたちの興味・関心を喚起するとともに、子どもたちの学習活動を引き起こしやすい形や順序になっていることも必要である。

それは、1時間ごとに変化発展する「学習内容の指導」である。(注1)

2005年度4月から2005年12月までに発表してきた栗原および竹下の論文においては、上

記の①に重心を置いてきた。(注2) 本論においては、具体的な教材を事例にあげながら、③の学習内容をめぐる子どもたちの学習活動のあり方に焦点を当てる。学習内容に焦点を当てると、必然的に②の学習方法を問題にしないわけにはいなくなるが、本論の主要なねらいは、あくまでも③の学習内容をめぐる子どもたちの学習活動の構想にある。

学校教育の現場では盛んに授業研究会が開かれて、教師たちの授業が研修の一環として公開される。そのときに必ず授業者によって作成されるのが「授業案」ないしは「学習指導案」である。この授業案の中には「指導過程」とか「展開」とかの項目が設定されて、どの授業案をみても、これまた必ず「学習活動」という欄が設けられている。それは、戦後の新教育が発足して以来厳守されている欄といっても過言ではない。

じつは、その「学習活動」欄の記述内容こそが、現代の学力向上のための授業改善のキーポイントなのである。この「学習活動」欄を設定するという発想の基底には、授業における指導とは、教師による単純な「教え込み」でもなく、さりとて子どもたちを「放任すること」でもなく、子どもたち自身の活発な「学習活動」を通して学習内容を習得するという間接指導の思想が込められている。

1989年(平成元年)の、いわゆる「第3の教育改革」前後から、教育方法としての「通しての指導」が前面に押し出され明記されることとなった。幼稚園教育要領においては総則の冒頭で、幼稚園教育の基本が「環境を通して行うもの」と規定されている。小学校学習指導要領においては、たとえばその折りに新設された生活科の教科目標の冒頭で「具体的な活動や体験を通して」行うことが明示されている。また、中学校学習指導要領の数学や理科などの教科においては、1989年以前から「通して」という指導方法に関する記述が見える。

この「通しての教育」は、子どもの自主的かつ主体的な学習活動の実現を目標としている。そのためには、教師が一つの教材を目の前にして、子どもたちにどのような活動や仕事(作業)をしてもらうかを、教師自身が考え出さなくてはならない。結局のところ、子どもたちが取り組んでみたくなるような学習活動の構想こそが、教師の専門的な仕事であるといつてよいのである。

教師がこのことに気付いていて、自覚的に「学習活動」欄が記述されている指導案は極めて少ない。とりわけ「活動」とは「生き活きとした動き」であることを意識して、子どもたちがどんな活動をすることで学習内容を習得するかが表現された授業案は少ない。本論では、授業を担当する教師が初めて教材を手にしてから授業を実施するまでにはどのような仕事をしなくてはならないか、授業前に教師がどのような仕事をすれば子どもたちにとっては「生き活きとした動き」となり、結果として子どもたちにとって「わかる授業」となるかを、実例を挙げて明らかにする。具体的には、小学校2年生の国語教材「さげが大きくなるまで」を事例にして、説明文の学習活動の実際的な構想を試みる。

本論執筆の直接的な契機は次のとおりである。2005年10月17日、佐世保市在住の経験20年余のベテラン教師、成石教諭から速達の封書が届いた。封筒の中には、教材「さげが大きくなるまで」と共に成石先生の手紙と指導案も入っていた。

手紙によると、11月2日には同学年の二人の先生のために成石教諭の公開授業が予定されているという。そのために指導案を作成してみたが、栗原の意見がほしいということであった。栗原は、以下に示すような公開授業が予定されている部分の教材解釈を中心とした書簡や教材などを届けた。それをもとに成石が、さらに指導案を検討して、公開の研究

授業に臨んだ。

11月2日(水)午前中、あわただしい日程であったが、栞原と竹下が成石先生の公開授業「さけが大きくなるまで」を参観した。

翌11月3日(木)午後、休日ではあったが、佐世保市において「さけ」授業の検討会を開いた。そのときの記録も、ほんの一部であるが、本論の最後に収録してある。

2. 教材「さけが大きくなるまで」

本論で取り上げる説明文教材「さけが大きくなるまで」は、小学校2年の教科書「こくご(下)」(教育出版、平成17年度版)の最初に収録されている。下に引用した最初の部分(7ページ)の最終行に「一 じゅんじょやようすを考えよう」とあるうちの「一」は、下巻教科書の最初の単元であることを示している。

教科書の本文は縦書きの表記であるので、横書きの本論においては漢数字なども、そのままの形で記述した。

(7ページ、教材「さけが大きくなるまで」の表紙に相当するページ)

さけが大きくなるまで 「生きものふしぎ図かん」を作ろう

- じゅんじょに気をつけて、さけの大きくなるまでを読んだり、しらべたことを図かんにまとめたりしよう。

一 じゅんじょやようすを考えよう

(8ページ)

さけが大きくなるまで

①さけは、北の海にすむ大きな魚です。あの七十センチメートルほどもある魚は、どこで生まれ、どのようにして大きくなったのでしょうか。(写真①)

②秋になるころから、大人のさけは、たくさんあつまって、たまごをうみに、海から川へやってきます。そして、いきおいよく川を上ります。三メートルぐらいのたきでものりこえて、川上へ川上へとすすんでいきます。

(9ページ、大きなさけの成魚が滝を登る姿をとらえた写真②のみ。1ページ大)

(10・11ページ)

③やがて、水のきれいな川上にたどりつくと、さけは、おびれをふるわせて、すなや小石の川ぞこをほります。ふかさが五十センチメートルぐらいになると、そのあなのそこ

にたまごをたくさんうんで、うめてしまいます。(写真③)

④冬の間、たまごからさけの赤ちゃんが生まれます。大きさは二センチメートルぐらいです。はじめは、ちょうど赤いぐみのみのようなものをおなかにつけていますが、やがて、それがなくなって、三センチメートルぐらいの小魚になります。(写真④)

⑤春になるころ、五センチメートルぐらいになったさけの子どもたちは、海にむかって川を下りはじめます。水にながされながら、いく日もいく日もかかって、川を下っていきます。(写真⑤)

(12・13ページ)

⑥川を下ってきたさけの子どもたちは、一か月ぐらいの間、川の水とウミの水がまじった川口のところでくらしています。その間に、十センチメートルぐらいの大きさになります。

(写真⑥)

⑦海の水になれて、体がしっかりしてくると、いよいよ、広い海でのくらしがはじまります。

⑧海には、たくさんの食べものがあります。それを食べて、ぐんぐん大きくなります。けれども、さめやあざらしなどに、たくさんの仲間が食べられてしまいます。(写真⑦)

⑨ぶじに生きのこって大きくなったさけは、三年も四年も海をおよぎまわります。

⑩そして、たまごをうむ時には、北の海から自分が生まれたもとの川へかえってくるのです。

以上が、説明文「さけが大きくなるまで」の全文である。

公開される研究授業は、第④段落である。

さらに詳しく④段落を見ていくと、次のような3文と1枚の写真、欄外の記述で成り立っていることが判明する。

④冬の間、たまごからさけの赤ちゃんが生まれます。

大きさは二センチメートルぐらいです。

はじめは、ちょうど赤いぐみのみのようなものをおなかにつけていますが、やがて、それがなくなって、三センチメートルぐらいの小魚になります。

(写真④は、透き通った川底の小石の上に2匹の「さけの赤ちゃん」と3個のさけの卵が写っているカラー写真)

そのページの下部の欄外には、「冬(ふゆ)」の文字と、本文中に出てくる「ぐみのみ」のカラー写真も添えられている。

3. 成石指導案（栗原への郵送分）の概要

2005年10月17日に成石教諭より「2学年3組 国語科学習指導案」が郵送されてきた。いずれ改善を加えられる一次案ともいえるべきものであるが、本時の学習過程を示す「展開」の部分の理解ができるように、概要を以下に述べる。

公開授業の実施日は平成17年11月2日（水）、指導者は成石せつ子教諭、子どもたちは2年3組の男児17名、女児16名の計33名である。

この学校全体の2005年度研修テーマは「自ら学び、深め合うことのできる授業の創造～国語科における進んで伝え合うことができる基礎・基本の充実～」である。さらに、低学年部のテーマとして「友だちの話をよく聞き、自分の思ったことをのびのびと話すことができる」が設定してある。（下線は筆者）

単元名は「じゅんじょやようすを考えよう「さけが大きくなるまで」（光村2下）である。

この単元の指導に充当する総時間数は14時間であり、公開する授業は第6時間目である。本時の目標としては、次の二つの目標が掲げている。

① 教科の目標

・卵から稚魚になるまでの過程を順序に気をつけて読み取ることができる。（読むこと）

② 研究主題に迫る目標

・友だちの発表を話し手を見て聞き、自分の考えと同じか違うか考えながら聞くことができる。話す人は、聞いている人の方を見て、聞こえる声で話すことができる。

（進んで伝え合うことができる基礎・基本の学習訓練）

・自分の思いを簡単な文に書いたり順序や時間を表す言葉にサイドラインを引いたりする作業を通し、自分の考えをもち学習に取り組むことができる。（書くこと）

本時の「展開」のプロセスを明らかにするために、「学習活動」と「教師の支援・指導」の概要を以下に列挙しておく。

1 前時の学習を想起する。さけが産卵するまでの復習をする。（前時までの模造紙）

2 本時のめあてをつかむ。

「卵からかえり、大きくなっていくさけの様子を順序よく読みとろう」

3 本時の場面を音読する。追い読み、一斉読み、一人読みをする。

・音読をさせることにより、教材文を正しく声に出して読む力と身体での学習で、言葉の大切さに気づかせたい。（ゆっくり・はっきり・正しく音読できる）

4 みんなで4の段の課題を読みとっていく。

（*以下、教師の支援・指導については必要と思われる部分のみ記述する）

・いつのことか分かる言葉を見つけ、□（四角）で囲む。

・冬の間とは、いつのことか自分なりの考えを本に書く。

・冬の間さけの卵は、どうなるかを考え、本に線を引く。

・はじめは、どのようだと書いてあるか、本に線を引く。

・やがて、どのようになると書いてあるか線を引く。

・「それ」とは、何のことか考える。

5 今日の学習を振り返り表にまとめる。

6 活動を振り返って自己評価をする。

7 次時の学習について知る。

以上が成石指導案（一次案）の概要である。

4. 栗原の教材解釈・発問づくりと学習活動の構想

2005年10月18日、栗原は、授業者の成石教諭宛に手紙を書いた。

以下に手紙の文章を収録する。執筆時の栗原の気持ちや雰囲気をも表現するために文章はそのまま残すことにした。ただし、本論文のページ数が限定されているので、改行部分を削減した。また、本論執筆にあたって加筆した部分はカッコ内に示した。さらに詳しい説明を必要とする部分には、行を改めてカッコ内に*印を付して加筆した。

成石先生、その後、お体の調子はいかがでしょう。

船小屋の研究会でお会いしたとき、とてもお元気そうだったので、安心しました。

(*成石先生は、ここ数年、体調を崩されている。そのことも気がかりとなっていたので、健康をたずねる言葉から始めることになった。2005年9月24・25日、福岡県筑後市船小屋で開催された福岡県生活科・総合的学習教育学会での分科会の席上、成石先生から10月か11月に国語授業を公開するとのこと聞き及ぶことになった。)

さる(10月)16日には、せっかくお電話をくださったのに、留守をしておりました。

じつは、13日夕方から広島へ、14日は尾道の小学校へ、そして14日夕方から16日夜まで東京に行っておりました。

成石先生からのお手紙とともに、説明文「さけが大きくなるまで」の教材と指導案、新聞資料などを拝受しました。さっそく読ませてもらいましたよ。

(*手紙には、「急に2年生が全体授業をするようになりました。そこで、私が先行授業をします」とあった。2年の3クラスのうちの一人の担任が、全校の先生が参観する全体授業をするのだが、それに先立って成石先生が同じ4段落の授業をして、他の2クラスの先生方が参観されるということであった。)

教材や指導案を読んでみて、気づいたことを、以下に書き出しましょう。

少しでもお役に立てればよいのですが。

(*以下の文章においては、説明文「さけが大きくなるまで」の④段落の授業を実施するという前提に立って、小学校2年生の2学期の児童を想定しながらの教材解釈と発問づくりの具体的な作業および学習活動の構想を述べることになる。手紙では○印で区切って列挙したが、本論では番号をつけてゴシックの小見出しを立てた。)

① この教材は文章情報と写真情報で成り立っている説明文であること

まず、この説明文は、大きくは題名「さけが大きくなるまで」と10段落の文章と、大小7枚の写真という二つ表現形式で成り立っています。この二つの表現手段を、うまく利用することです。

つまり、順序を追いながら文章情報を読み取るとともに、写真情報を読み取らなくてはなりません。

(*この教材の題名と本文は全部で6ページである。文章(活字)の部分と写真(カラー

印刷)の部分は、面積比でいえば、およそ1:1、ほぼ同量となっている。この教材の授業においては、文章を読み取るだけではなくて、写真から読み取った事柄を言語化して発表することも重要な国語学習となる。

ただし、本教材の表紙に相当する部分(教科書7ページ)のコピーは郵送されてこなかったもので、この説明文全体の単元目標でもある「じゅんじょやようすを考えよう」と「『生きものふしぎ図かん』を作ろう」の視点を考慮しないままに、栗原の教材解釈と発問づくりが進んでいることを断わっておきたい。

② 応答しやすい発問を心がける

たとえば、文章に着目すると、本時の4段落の最初の「冬の間」のところの発問が、「冬の間とは、いつのことですか」とありますが、ここは、「冬の間とは、何月からですか」のほうが、子どもにとって答えやすいでしょう。

ということは、前の2段落の「秋になるころから」のところで、「秋というのは何月ごろから?」というように、同じような発問をして、子どもたちが慣れておくことです。

(*教材解釈とは、教師が教えたこと(指導したいこと)を自分で「発見する」作業である。また、発問づくりとは、教師が教えたことを、子どもたちの「学びたいことへと変換する」仕事である。)

③ 類似した言葉の扱い方

また、「さけの赤ちゃん」という言葉も、4段落の1文に出てきますが、2段落で「大人のさけ」という言葉を扱っておくとよいでしょう。

似たような「さけの成長段階」を示す言葉には、同じ4段落に「小魚」、5段落に「さけの子ども」という言葉も使っています。

(*「さけが大きくなるまで」という題名の説明文であるから、小学校2年生児童を想定して教材自体が人間のそれぞれの成長段階での呼び名と結びつけながら記述してあることに、まずは教師が気付かなくてはならない。具体的には、「たまご」「さけの赤ちゃん」「小魚」「さけの子どもたち」「大人のさけ」などの言葉が用いられている。これらのキーワードは、それらが初出した段落で扱おうとともに、単元のまとめの段階でも、さけの成長段階の呼び方、大きさや順序、特徴などを表や簡条書きに表現してみるのも「生き活きとした動き」となりうる。)

④ 数字(漢数字)は対比させて

4段落の2文目には「二センチメートル」というさけの赤ちゃんの大きさを示す言葉が出てきます。

この数字の扱いについても、意図的に授業計画の中に入れておくといよいでしょう。

すなわち、2cmという大きさも、ただそれだけを単独に扱うよりも、ほかの数値と比べると、その大きさを強く意識することができます。

2cmと70cmを対比させれば、きっと子どもたちを本気にさせるような面白い授業になりそうですよ。

(*この教材に出てくる数字と単位)列挙すれば、成魚の体長七十センチメートル、成魚が登れる滝の高さ三メートル、卵を産む穴の深さ五十センチメートル、さけの赤ちゃんの

体長二センチメートル、小魚の体長三センチメートル、五センチメートルになったさけの子どもたち、さらに十センチメートルの大きさ、三年も四年も泳ぎ回る、などである。

これらの数字のもっている現実的な意味やイメージなどを、対比させたり、テープや絵で実際に表現させたりする活動を通して、どうにか実感させたいものである。）

⑤ 体長70cmの絵を子どもに描かせてみては？

この（教材の）文章（の全文）を通読すると、1段落から「七十センチメートル」ぐらいの魚とか、「三メートル」ぐらいのたきとか、「五十センチメートル」ぐらいのあななどのように、長さを表わす漢数字とカタカナの単位がたくさん出てきます。

このことから、子どもたちが長さに着目できるように、実際に70cmの長さの横長の画用紙を準備して、大きな「さけ」の絵を描かせてはどうでしょうか。

そして、3メートルの滝や50センチメートルの穴を実感させながら、読み進めるのです。2センチメートルのさけの赤ちゃん、3センチメートルぐらいの小魚、5センチメートルぐらいのさけの子どもたちと、そのあとも次々と長さを表わす文字が続出します。

いま（8時30分ごろ）、私が実際に作ってみました。

B4の用紙を横に2枚つなぐと、のりしろを調整すれば、ちょうど70cmの横長の用紙ができるようです。これに、体長「70cm」のさけの絵を描いてもらうのです。

図画工作の時間ではありませんが、1時間だけ扱ってもよいかもしれません。

宿題という手もあります。

（*横70cmの用紙を作ってみて、その大きさに私自身が驚いてしまった。70cmという数字そのものや頭に思い浮かべるイメージだけではなくて、実際に手に取ることになる実物大の長い用紙が成魚の大きさを如実に物語ってくれる。）

⑥ 「ぐらい」が何回使われているか数えてみよう

本文の長さを表わす言葉を見ていて気づいたのですが、長さの言葉のうしろには「ぐらい」という言葉がたくさん使われています。

「ぐらい」が何回ほど使われているかを、たずねてみるのも、面白いでしょう。

2年生の子どもにとって、数を数えるのは楽しい仕事です。

そして、「ぐらい」の意味をたずねてみるとよいでしょう。

もちろん、「およそ」という意味であり、微妙に大きさの違う個体だからこそ、この言葉が使っているのでしょう。

このことを、子どもなりに、どのように表現するものかと、楽しみに期待するのも教師という職業の面白さでしょうね。

⑦ 「ぐみ」のようなものとは

本時分の4段落の第3文には、「ぐみ」のようなものをおなかにつけていと書いてあります。これは、きっと、さけの卵の「いくら」の赤い名残であり、さけの赤ちゃんにとっては「栄養」にほかならないでしょう。

これも、教師が「何だろうね」と疑問を投げかけると、気付く子どもがいるかもしれません。

⑧ 「写真を見て発見したこと」を発表してもらう

写真を見ながら、「写真を見て発見したこと」を発表してもらうのです。

この仕事は、慣れてくるとたくさんの発表ができます。

ということは、4段落の授業までの3枚の写真を使って、どんどん気づきを発表するチャンスを設定して、発表の練習をすることです。

この活動が、じつは「話す・聞く」の言語コミュニケーションの基礎を育てることにかなりません。

(*写真を見て「気付いたこと」というよりも、「発見したこと」と問いかける方が、子どもたちの活動(生き活きとした動き)を誘発できる。

栞原が二人の幼稚園児に対して「たんけん(探検)に行かないか」と呼びかけたことがある。すると、返ってきた言葉は「あぶないところ?」であった。もちろん二人はすぐに靴を持ってきて、園庭の探検に出かけることになった。「たんけん」という言葉のもつ誘発力に驚いたことがある。教師の使う言葉の大切さが分かる。)

④段落の写真は、川の中の小石の上に7つの「さけの卵」が写っている。教師が「卵はいくつある?」と発問して、子どもたちが正確に数えてみるのも大切な「学習活動」である。

よく見ると、4つの卵は丸い(真ん丸の)形をしているが、他の3つは違う。

3匹のうち、すでに魚の形をしていて腹に橙色の袋(かたまり)をつけているものが1匹。体の半分(頭側)だけがすでに出ているものが1匹。そしてもう一つは、尻尾だけがのぞいている。

7つの卵のうち、2つは、すでに目が見えている。まだ、丸い形をしている卵にも、よく見ると、なにやら黒い点が見える。ひょっとしたら目かもしれない、と予想もできる。また、7つの卵に番号を打って、真ん丸い卵から魚の形に至るまでの順序を付けてもよい。拡大コピーをして、7つの卵の写真を切り分けて、順番に並べてみるのも、子どもにとっては楽しい学習活動になる。

⑨ 家庭学習(宿題)も教師の指導のうち

4段落の終わりに「小魚」という言葉が出てきます。

「小」か、あるいは「魚」のどちらかを使って「言葉集め」の宿題をすることをおすすめします。

たとえば、「魚のつく言葉を10以上、見つけてきてごらん」というように。

そして、翌日、かならずノートをチェックして、良いところをほめることです。

宿題をしたくなるような「学習方法」を指導することです。

(*学年始めに学習ノートを手渡すときに、子どもたちのノートに「だい1ごう」という番号をつけて、自負学習の目標にすることもできる。)

⑩ 国語科独自の学習方法としての「言葉の足し算」

3段落に、「おびれ」が出てきます。

もし、この教材の授業のはじめごろに、体長70cmの絵を描いていたら、魚の部分の名称も書き込むとよいでしょう。

「おびれ」とは「魚の尾の部分についている鰭（ひれ）」です。

つまり、「言葉のたし算」の「お十ひれ（びれ）」なのです。

この「言葉のたし算」が理解できることも国語の学力の一部です。

この「言葉のたし算」についても、子どもたちに説明させてみることです。

教科書の記述にはありませんが、そのほかに、魚には「むなびれ（胸のひれ）」「はらびれ（腹のひれ）」「尻びれ」「背びれ」もあります。

発展的に、ほかの「ひれ」を扱うことで、言葉の面白さも味わえます。

さけ・ますなどには、一つだけ、ほかの魚にはない「あぶらびれ（油+びれ）」があります。参考までに、魚拓コピーを見てください。

⑪ 「北の海」を理解するためには日本地図も準備を

そうそう、1段落の1文目（さけは、北の海にすむ大きな魚です。）の「北の海」を理解するために、日本地図を見せることもお忘れなく。子どもたちの日常生活の中には、天気予報の地図とか、車の中のナビゲーター上の地図などの形で、すでに入り込んでいます。

そのときも、地図を提示して、子どもたちには何でも言わせてみてください。

けっこうまっとうなことを言っているものです。

（*幼稚園児のタイセイ君が、地図を見て「おじいちゃんのいる山口をカクニンしたよ」と知らせてきたことがある。子どもたちには「確認」という漢字は書けないが、「カクニンすること」はできるのである。二年生児童の言語感覚は、ほとんど大人に近い。）

また、東京や佐世保、九州などの地名、そして東西南北を扱ったあと、「北の海」のおよその場所を、教師から丁寧に教えてやればよいのです。

⑫ 気付いたことは何でも言えること（それは発表のチャンス）

子どもたちの言葉を拾い上げ、ときに「良いことを言っているから、みんなに説明してあげて」などのように励ましながら子どもの言語表現力を育てるのです。

さらに、ほかの子どもの意見を良く聞いていると、たくさんの方に気付くこともわかってきて、「聞く力」や「聞く態度」も育ってくるのです。

（*教師は、子どもたちの一人が何かを言い始めたら、子どもたち同士が触発し合い、発展することを忘れてはならない。）

以上、本時授業の4段落を中心に、できるだけ具体的な教師の指導にかかわる事柄を書いて見ました。

今日の夕方には、鳥取県の大山のふもとまで行き、明日は小さな小学校の校内授業研究会に参加してきます。21日（金曜）午後には、行橋の小学校の2年生の教室をのぞいてきます。来週には私からも連絡をしますので、教材解釈や発問づくりを進めておいてください。とりいそぎ、まずは、手紙の形でご返事いたします。また。

2005年10月18日（火曜）09時52分

（自筆サイン）

5. 成石授業の参観

2005年11月2日(水曜)の第2時限に成石授業を参観することになった。その日、早朝に大分市を発って、9時10分には長崎県佐々町立口石小学校に到着した。

校長先生への挨拶もそこそこに、9時30分には2年1組の成石学級へ入らせていただいた。少しでも多くの時間、子どもたちの様子を参観したいとの願いからである。

9時45分から10時25分までの40分間、成石授業「さけが大きくなるまで」を参観する。そして、10時35分には口石小学校を出発して福岡県田川郡香春町立採銅所小学校の授業参観と講演に向かったのであった。

公開授業の翌日の11月3日午後には、成石授業の検討会を開くことになった。出席者は、授業者の成石教諭のほかに同学年教諭2名、さらに夫君の成石俊臣教頭、生活科の実践研究仲間の木村教諭、そして栞原の計6名である。

その授業検討会の様子は録音に収録してあるが、栞原の次のような話から始まることになった。「…いやあ、にぎやかだったね。思わずぼくはね、『成石先生、この子たち、今日だけちょっと特別ににぎやかなの』と言ったら、(成石先生から)『いや、いつもです』って(という答えが返ってきました。)(先生方、笑う)

さらに成石教諭からは「(今日は)おとなしい方です」との声。それに対して栞原は「あれでおとなしいの」と念押しという言葉。成石「はい」、栞原「まあ、いいか。」(先生方、笑う)などの会話が続く。

上記の会話が示しているように、成石学級の子どもたちの授業への取り組みは、一見すると、賑やかで、騒がしい印象を与える。けれども、子どもたちは瞬たりとも本時の学習内容から逸脱していないし、それどころか学習内容への集中力は極めて高いと言わなくてはならない。この点については、あとで挙げる竹下の授業感想の記述にも詳しい。

同学年の先生も「もう、本当にすごいって思って、見せていただきました。どの子も発表して、それで発表することが楽しくてたまらない!というのが伝わってきたので、ああ、うちもこういうふうにしなさいといけないって思いました」と述べられている。

6. 授業を参観した院生(竹下)の感想

11月2日、成石授業の参観に同行した竹下は、次に挙げる気付きと感想を作成した。この文章はコピーされ、翌日午後の佐世保市での授業検討会において資料として提出された。授業検討会の参加者へは、栞原が音読しながら紹介することになった。

成石先生の授業を参観して気づいたこと、感想 (051102)

山口大学大学院 学校教育専修1年
竹下 真生

日時/2005年11月2日(水)9時40分~10時25分

場所/長崎県佐々町立口石小学校、2年3組教室

教科・教材/国語・説明文「さけが大きくなるまで」(教育出版)

授業者／成石せつ子先生、2年3組の児童31名（当日、2名欠席）

■休み時間の様子

（乗原先生と竹下は、9時30分ごろ2年3組の教室入室）

- ・教室に入ると、子どもたちの元気いっばいの「こんにちは」の声があちこちから。
- ・女の子4～5人が「ドレミのうた」を歌いながら教室を一行に並んで行進している。
- ・男の子たち2人、教室の中でおいかけっこをしている。
- ・児童数名がビデオカメラの回りに集まって笑顔でピースサイン。
- ・飛んだり、はねたりしている子どもも。

乗原先生「今日は、みんな少し興奮しているのかな」

成石先生「いつもこんな感じです」

※子どもたちは、エネルギーが有り余っている様子。

「2年生」という子どもたちの元気よさ、活発さを改めて感じた。

■授業参加のルールやマナー（学習規律）について

- ・定刻が近づくと子どもたちは席に着く。ほとんど定刻と同時に授業が始まる。
（※口石小学校はノーチャイム）
- ・T「今日は姿勢がいいねえ。〇〇さん、いいねえ」と、子どものよいところを誉めている。
- ・「手をあげて発表する」という授業参加のルールが子どもたちに身につけている。勝手に発言したり、私語をしたりする子どもはほとんどいなかった。
- ・子どもたちは、すばやくまっすぐ手を挙げていた。
- ・手をあげるとき、子どもたちは「はい、はい、はい」としきりに叫んだりするのではなく、一回だけ「はい」と言っていた。
- ・T「まちがってもいいんです。みんなで知恵を出し合いましょう」や、T「わからんって言った人をバカにしたら絶対にだめ」など、学習内容だけでなく、学級みんなでの学習の仕方や人と人との付き合い方で大切なことも、同時に指導していた。
- ・T「じゃあ、聞きますよ。いいですか」C_n「はい」や、C「～（意見）～と思います」C_n「同じです」など、授業の中での先生と子ども、または子ども同士の応答行為が見られた。

■授業に集中している子どもたちの様子

- ・基本的に、挙手をする子どもが多い。（3分の2以上）積極的に授業に参加している。
- ・手を上げていて当てられなかったら、残念そうに「くっそお～」「あぁ～」という声が出る。「発表したい」という意欲が子どもたちの中にある証拠。（低学年の子どもたちのすてきなところ）
- ・「よし、わかった！」「そうだ！」「あっ、わかった！」などの声が出る。（低学年の子どもたちのすてきなところ）
- ・授業の終わりごろ、中学年（？）の学級が教室横の中庭をぞろぞろと通った。そのため、しばらく窓の外はザワザワと騒がしかったのだが、2年3組の子どもたちは、誰ひとり外を向かなかった。もちろん成石先生も。先生も子どもたちも授業に集中し、「学習内

容」と真剣に向き合っていたという証拠だと思う。

■成石先生が工夫されていた点

①子どもたちの「生き生きとした動き」を呼び起こす教師の指導

- ・ T 「どこ？指さしてみてください」
… 「探す」「指さす」という活動
- ・ T 「見つけたら、えんぴつで線を引きなさい」
… 「見つける」「線を引く」という活動
- ・ T 「2つ見つけたら、線を引いて番号を付けなさい」
… 「見つける」「線を引く」「番号を付ける」という活動
- ・ 音読する場面が多い（部分音読）
… 「教科書を立てて持つ」「声に出す」という活動
- ・ 実際の長さをものさしで確認する
… 「2センチメートル」と「3センチメートル」をものさしで確認し、
自分の手で示す活動
- ・ T 「さけのたまごはどれ？」（写真のカラーコピーを使って）
… 「黒板の前に出て発表する（2人）」
「みんなで声に出してたまごを数える」という活動

②発問について

- ・ 子どもたちが具体的に思考する手がかりとしての発問が考えられていた
T 「冬の間って、何月のこと？」
T 「さけの赤ちゃんと小魚の違いは？」

■感想

授業の最初に、子どもたちが、題名「さけが大きくなるまで」を声に出して読んだとき、私はそのすばらしさに驚きました。読むスピードといい、声の大きさといい、すばらしい一斉音読だったと思います。きっと、4月はじめの学級びらきから、成石先生の一貫した音読指導があったのだと思います。2年生って、こんなにも凛々しい声で、はっきりと音読ができるものなのかと、驚かされました。どんな音読指導をされているのか、ぜひお聞きしたいと思いました。

また、成石先生の授業では、子どもたちの「生き生きした動き」がたくさんあったように思います。一時間の授業の中で、子どもたちが「生き生きした動き」をせざるを得ない状況がたくさん仕組まれていました。子どもたちにとっても、参加しやすい授業だったのではないかと思います。

最後に、成石先生の授業では「授業参加のルールやマナー（学習規律）」が、指導対象としてきちんと位置づけられていたということです。そのため、勝手な発言や私語はほとんどなく、みんなよく手を挙げて発表していました。つまり、子どもたちに「授業参加のためのルールやマナー（学習規律）」が身につくことで、休み時間に見たような子どもたちの有り余っているエネルギーは、「学習内容と向き合うためのエネルギー」として有効

活用されるのです。子どもたちのエネルギーは、決して「授業で騒がしくするためのエネルギー」ではないし、そうなるはずはないのです。学習規律の指導の大切さを、改めて考えさせられた一日でした。

現場の授業を参観することは、小学校教師を志す私にとってたいへん貴重な勉強の機会です。成石先生、お忙しい中、授業を参観させてくださったこと、心から感謝いたします。ありがとうございました。

(終わり)

7. おわりに

①子どもたちの集中力の高さ

成石学級の子どもたちの集中力には、教室の後ろで見ていた栞原も驚かされた。

授業も後半になって、他のクラスの子どもたちが教室のそばの外道路を通ったのだが、成石学級の子どもたちの中には、そちらのほうに気を取られて余所見をする子どもは一人もいないのであった。

成石先生が発問を投げかけると、考えたあとで子どもたちは挙手して答えようとする。ほとんどの子どもが挙手するのだが、「はい、はい」と賑やかになることはない。指名されて発表できるのはたったの一人である。成石先生が一人の子どもに指名すると、指名をされなかった子どもの中から「ああ！」とか「くっそう！」などの残念がる声上がる。心から自分で発表したいとの気持ちが伝わってくる。

授業検討会の中で、栞原は次のように授業の全体的な感想を述べている。

栞原「いやいや、私、成石先生の授業を何度か見ていますけど、とてもよかったと思いますよ。あのにぎやかな子どもたちが、よく、学習内容の方向に向けていたと思いますね。逸脱がぜんぜんなかったですね。

たいてい、よそを向いたりするんだけどね。みんな、「くっそう」とか言ってね、当たらないと（先生から指名してもらえないと）。「くっそう」とか「ああっ」とかね、嘆きよったよ。あれはいいなあ。みんな、本気になっていたね。」

同席されていた木村先生も、その事実が大いに感心されて「その『くっそう』とか言っても、そのあとはまた（手を）あげるわけでしょう。もう（手を）あげないとかは、ないんですよ」と述べられている。

栞原「うん。もう（ほかの子が）当たると、もうね、残念がって、あの残念がるくらい本気になるのがいいわけよね。」

成石「大人しいクラスだったんですけど、どうしたんでしょう。栞原先生が来られたので、がんばったんじゃないですか。」

栞原「それなら、毎日来る（ことにしましょうか）。」（先生方、大笑い）

子どもたちの様子からうかがうと、この日の授業が公開授業であろうと無かろうと、関係ないという感じであった。この本気を育てる成石先生の指導力は、かねてから感心してきた事柄である。

かつて成石先生が佐世保市内の小学校2年生を担当されていたとき、子どもたちのする掃除があまりにも上手なので、近隣の町の小学校の校長をしていた大学時代の同級生とわざわざ成石学級の掃除の様子を参観しに出かけたことがあった。現在の口石小学校の教室

においても本物の「人間教育」が実践に移されていると、高く評価したい。

②音読・一斉読みのうまさ

もう一つ、特筆しておかなくてはならないことがある。

それは、子どもたちの音読のうまさである。授業の始めの音読も、声の大きさといい、発音される言葉の確かさといい、申し分なかった。さらに、言葉の意味を理解した上での音読なので、聞いている方でも文章の意味をたどることができた。

さらに、授業の途中で何度も出てきた「一斉読み」の見事さであった。31名の子どもが一斉に読むと、ほとんどの場合に「間延び」した読みになるのであるが、成石学級の一斉音読はすっきりとした速さで、声もよく揃っていて、さわやかな音読になるのであった。

この音読の指導にも、コツが隠されていたようだ。

成石「一つ言えるのは、音読を、これは読み込んでいたんですね。だから、自分でも、栗原先生が音読をしっかりとさせときなさいって教えてくださったので、2週間前から音読はしてるんです。

で、毎日での宿題でも音読は出ているんですけど、学校で、全員に力をつけたかったので、(授業の中で)「追い読み」というんですかね、いちばん最初に私が読んで、(子どもたちが)追い読みをして、そのあとは、朝。朝、読書タイムがあるんですけど、そのときに1・2回読んで読書タイムをして。で、給食を早く食べた子は、読む。そして、帰り。帰りも読む。1日、最低3回かな。」

栗原「1日3回読ましたんか。」(みんな、驚く、笑う)

成石「はい。すみません。本当に、すごく能力が低いって言ったら失礼ですけど…」

栗原「まあ、はじめから(能力の)高い子はいないからね。」

成石先生は謙虚に表現されているが、音読の力、そして一斉音読の力を育てられたのは、まちがいなく学級担任の成石先生の指導力のなせる業である。

③子どもたちが写真から「発見」したこと

このたびの授業場面の第④段落は、説明の文章が教科書の上半分に書かれていて、下半分は「川底の小石の上の7つの卵」の写真である。栗原が指摘したように、この写真から何を読み取るかが、この場面の授業を左右する。

一人の女兒(*)が、文字通りの「発見」をして、それを黒板のところの拡大写真を用いて説明してくれた。そのあたりのことを栗原は次のように指摘している。

栗原「まあ、大きくは、写真を読むというのは、この説明文ではとても大事よね。

だから、あの子(*印を付した女兒)が言った、「赤ちゃん」と「たまご」と「出かけ」というのは(じつに的確な言葉表現です)。

その「写真」を(みて)、「たまご、5つ」「赤ちゃん、1ぴき」「中ぐらい」、「中間」というかね、「出かけ」とかね、「生まれかけ」だとか「頭だけ出た」とか。それを言葉化したら国語(の学習になるの)だから。」

成石「小石の間のとことか、普段は言うんですけど、私がどんどん切ったんですよ。すみません。」

栗原「まあ、そういうこともあるかもわからん。だから、「写真で発見すること」ね。

(写真を見て)「わかること」なんていったら、面白くないかもしれないけど、「発

見」って言ったら…」
成石「発見ですね。ああ、なるほど。子どもが、本気になる…発見…」
栞原「『写真を見て発見すること』言うたら、やる気になるけど…」
成石「発見、発見。」
先生①「おお、いい言葉。」
栞原「そうですよ。」

以上のように、事前の教材解釈の段階で栞原が用いた「発見」という言葉のもつ教育的意味を、授業検討会に参加された先生方には理解をしていただけたようだ。

さらに詳しくは授業記録とともに、いずれ授業検討会で話題に出された事柄や子どもたちの手紙などを入れて、「授業検討会で教師が学び合うこと」とでも題して、授業研究のあり方を少しでも明らかにしてみたい。

(注)

(注1) 栞原が、「授業における三つの指導対象」としての「学習内容・学習方法・学習規律」について、最初に体系的記述を試みたのは『授業における道徳』（広島大学附属小学校学校教育研究会、1978年、29～106ページ）においてである。

(注2) 竹下が2005年4月に大学院教育学研究科に進学して以来、12月末までに栞原と共同で執筆した論文は次のとおりである。

栞原昭徳・竹下真生「図書館利用学習のための入門授業（2）－総合的学習「ゴッホのひまわり」授業の構造と実践－」、「大学留学生に対する「わかる授業」の実践（2）－講義「異文化を学ぶ」における小2国語教材「ニャーゴ」の音読指導－」、「小学校低学年国語授業の指導技術（1）－2年「たんぼぼのちえ」授業における学習規律の指導実態－」。(2005年9月刊『教育実践総合センター研究紀要第20号』中)。

また、2005年12月20日発行の山口大学教育学部研究論叢第55号には、栞原・竹下「幼児の遊びと1年生の授業にみる学習規律指導の原点」、竹下・栞原「学習規律の指導と「わかる授業」の成立（1）－学習規律との出会いから2年間を振り返って－」を公表している。